

会報七月号 人としての内面的充実

目次

- ・ 克己復礼：自己疎外、人間疎外から戻る
- ・ 危険な錯覚
- ・ 人間という存在
- ・ 感激性：頭が良いということの意味
- ・ 力を尽くす方向：理想を持つ
- ・ 理想（志）を阻害するものはあるのか
- ・ 鍛錬陶冶次第
- ・ 努力の仕方

今月の会報は、安岡正篤著「青年の大成」（致知出版）の紹介である。

人間とは何か。如何に生きるべきか↓人間は造化（仁愛）の主体↓自己疎外から自分に立ち返る↓明温清↓感激性↓理想（志）↓鍛錬陶冶次第↓努力の仕方。

● 克己復礼：自己疎外、人間疎外から戻る

とかく外へばかり心をはせて、内を忘れる。外のことは取り上げて、自分を省みない。自分の欲望の対象にばかり価値を置こうとする。それは陽のはたらきであり、それ自体間違っているわけではない。しかし、その結果、とっ散らかって始末がつかなくなった時、人間そのもの、自分そのものに立ち返ればはつきりすることも多い。日常生活にしても、様々な刺激に駆り立てられて矛盾対立を生み疲弊する。その時内省してみると実に他愛無ことが多い。自然や先哲（理想）から離れ、様々なネットの情報に気を取られたら生活はどうなるのか。自分はどこかへ失われてしまう。

● 危険な錯覚

自分を取り戻すとはどういうことか。

例えば飲食。本当に美味しく食べようと思うなら、外に美味しいものを探すのが本当か。それとも、自分の腹を減らすのが本当か。学問も然り。我々が人格や頭脳を良くするには、様々な知識を得るのが本当か。知識欲を旺盛にしたり、知識を愛する情緒や品性を養うのが本当か。これは、当たり前のように重要な問題である。自分を省

みることが大切である。そこに恐怖を感じても、その怖さから逃げる人生というものは、人生の本質を欠く。

●人間という存在

そもそも人間とはどういう存在か。自覚する造化（万物を生成化育するはたらき）である。志を立て、道に順じ、理を活かして物事を化していく仁愛そのもの（化身）である。その本質は徳性（仁義礼智信敵勇忠孝敬愛等）にあり、才知・技能は人の属性である。

子供時代の徳性で最も根本的なものは、「暗い・明るい」ということ。①人間はまず光明を愛する。②明るいうのはそこに熱（温かさ）があり、熱があるということとはエネルギーがあるということ。次に、③清いということ。④素直であること。そして、⑤忍耐強いということ。素直というのは人間を作る前提であり、忍耐というのは物事を成し遂げていく根本である。「明るい、温かい、清らか、素直、忍耐」これらが根本の徳である。そして、「敬する、恥入る」。敬や恥が無いと、自らの不徳を意に介しなくなり、伸びない。

これら徳性が発達するにつれて、知識・技能が発達する。そしてこれらは生命力の強い若い時に鍛錬陶冶してこそ伸びる。この徳性を働かせる大事な潤滑油が情緒（明、温、清、素直、忍耐、敬、恥等）である。

●感激性：頭が良いということの意味

一般的に、人間の大事な機能は知性・知能・技能であって、品性や情緒・気概を軽視してきた風潮がある。しかし、頭が良いというのはどういうことか。記憶力や理解力というのは頭の本質的な働きではない。それよりも直観に優れていなければならぬ。知識ではなく智慧（知識＋情緒＋行動）でなくてはならない。

情緒が発達しなければ智慧や行動力は生まれない。情緒の無い人間が集まったところで、浅知恵や悪知恵しか出ない。

子育てについても同じ。母親が子供の言葉や意欲を良く察知するのは、情緒（愛情）に優れているから直覚するのである。父親は我がある分、子供の片言に対する理解は浅い。

我々は、自分の為だけでなく、天下国家、世の中の為に、熱烈な気概や感情を豊かに持っているだろうか。

●力を尽くす方向：理想を持つ

自覚する造化（仁愛）である人間にとって、消極的・利己的・享乐的習慣ほど悪いものはない。造化を阻むからである。そこで、自分の力を奮って悪習慣を去ることが大事である。

そのためにどういうことを考えなければならないか。

まず、熱烈な理想を抱くことである。それは壮大な計画を立てると言うのではない。「こんな未熟な人間でどうする。もっと立派な人間になるんだ」という憤発心を起こすことである。太陽の光に浴さなければ物は育たないように、人間の理想精神とは心の太陽であり、理想に向かって情熱を傾けるということは、太陽を仰ぐという事。これがないとあらゆる徳が、従って才芸能も発達しない。その大事な条件は、我々の日常生活に真剣な理想を持つということだ。自分の心に理想の情熱を喚起するような人物、理想像を持っているかいないかで、人は大きく変わる。だから、私淑する人物を持ち、愛読書、座右の書を持つことだ。

例えば、凡人の考えとは違うが、女に好かれるような男では小さい。つまり、それくらいの気概がなければならぬということだ。男と生まれて、金、名誉、地位、女、権力などを欲しがったり、取りつかれたりするようではまだ器量が小さい。金や地位で男になるようなのは、まだ本当の男ではない。そんなものは人に任せて、威風堂々と世に立てることこそ男である。慈悲柔和の権化にもなるし、勇猛剛健の権化にもなる。

女も同じ。詰まらぬ男に好かれるようでは大した女ではない。

●理想(志)を阻害するものはあるのか

①病弱は？

甘い同情は何にもならない。ヘレンケラーを思い出せばよい。病弱は鍛錬陶冶の障害になるわけではなく、むしろ怠惰な人間は、せめて病氣くらいに罹患しなければ救われないかもしれない。「死んだ方がましだ」と考えるところから勇氣が出て丈夫になるかもしれない。

②貧困は？

オランダ語の辞書を二冊も写し取った勝海舟を思い出せ。「困難ここに至ってまた感激を生ず」と言った彼には、全く体を熱くさせられる。金が無くてもできる学問は幾らでもある。そして、金のかかる学問は、金のかからない人間学の裏打ちがなければものにならない。

③頭が悪いのは？

ナポレオン、ニュートン、エジソン、西郷隆盛、東郷平八郎等を思い出せ。愚鈍であることは時に、大成のための資質とさえ言うことができる。愚鈍は誤魔化しが利かないのでコツコツやるしかない。器用な者は轻巧で小手先になりがちである。下手な者が一生懸命に習い込んだものは重厚なものである。練り上げたら相当なものになる。利口な人間は、とかく外へはしり、内を修めることを軽視する。どうしても大成しにくく味がない。

④忙しいのは？

つまらない人間は、そのつまらなさを誤魔化すために「忙しい」と口にする。忙しいと言ってはならない。確かに、心に余裕がなければ大きな問題を取り図ることは難

しい。その忙しさは、つまらないことまで全部自分でやり過ぎるから忙しがるのが少くない。そういう習慣は変えなければならぬ。「日本野史」を完成させた飯田黙叟（忠彦）や王陽明を思い出せ。活動して腹が減れば食欲が出るのと同じで、多忙になれば却って求道心が旺盛になり頭が働くものである。

人間はどんなことが興っても、自在に対応できる力を不断に養っておくべきである。薬、冷暖房、ネットの情報、そういう他物に依存しては、生命力は弱くなるばかりであり、自分自身を鍛錬陶冶しておかないと、結局悲劇になる。

その意味において、病弱、貧困、愚鈍、多忙等は、理想（志）を阻害するものにはなり得ない。逆に自分を鍛錬する妙薬となる。知的精神的能力は更に代用の利くものではなく、従って、猶更甘やかしてはならない。

人は境遇や素質を大切にしなければならぬが、結局は何よりも自主努力である。なぜなら、人間は放っておいて善くなるような自然的能力を持ち合わせてはいないからだ。人は放っておいたら善（造化）に反抗していく傾向を持つ。それは、怠惰、勤労働を嫌う、我儘になる等である。最高の教育を受けた人間も、その後の鍛錬陶冶を欠いては立派な人間には成り得ない。逆に、劣悪な教育も、自己の鍛錬陶冶次第では、なお改善され得るものである。

● 鍛錬陶冶次第

人間は鍛錬陶冶次第である。金属を製錬するのと同じように、人間も焼きを入れて鍛えるということをしなないとモノにならない。子供を自由放任してしまっただけ決してモノになるものではない。ほったらかして良くなるというのは、相当恵まれた天分を持ち、他者から見たらほったらかされているようでも、実は人知れぬ感化鍛錬を受けているに過ぎない。一般にはやはり良い環境と雰囲気の中で育てるのがよい。

昔から、「環境が人をつくるか、人が環境をつくるか」という問いがある。これは、どちらか一方が正しいというのではない。置かれた環境の力が、人の力よりも強いと環境の影響を強く受ける。つまり、環境は人をつくる。また、人が環境をつくるのも本当である。そもそも、人が環境を作れなければ、自覚する造化としての価値は低い。人としての自律・自由・主体性は無いことになってしまう。人は一つの小さな天である。天であるとは自然である。自然とは創造・変化、所謂造化である。物事を創造（生成化育）していくことが自然である。従って、その一部である人間は、物事を主体的に創造することができなければならない。現実に人間は現代文明をつくってきた。しかし、無限に無制限に創造していくことはできない。

実相は、人が環境をつくり、環境から人がつくられて、人と環境と相俟って人間世界を創造変化させているのである。人の創造力が弱い時は、環境を重く見なければならぬ。環境が悪くなれば、人を重く見なければならぬ。人間が積極的に創造力・革新力を発揮していくことができれば、環境を大きく変化させることが可能である。従って、ひとりひとりが積極的に創造的精神を発揮させることが大切である。それ

を「一灯照隅」と呼ぶ。各々が「一灯」となって、自分を輝かせてその周囲を照らす。世界人類の為もよいが、まず自分がいるその場所を照らす。足元を照らす。これは絶対に必要なことで、また出来ることである。この一灯が万灯になると、日本の環境も変わり、世界も変わる。ここは不断に努力してゆかなければならない。そういう努力をしないと、人間は環境と共に容易に墮落して退化する。鍛錬陶冶して築き上げることは難しいが、墮落は非常に早い。では、どのように自己を錬成するか。

●努力の仕方

①寸陰を惜しむ↓三上を持つ（枕上、馬上、廁上）

時間というものは、まとまった時間を作ろうと思うとなかなかできるものではない。だから、「時間ができたら」と考えるのは、「やりません」という意志表示と変わらない。しかし、どんな人にも寸陰（ちよつとした時間）はある。そのちよつとした時間を掴むのである。一芸一能に優れた人は皆寸陰を掴むのが上手い。寸陰は長い時間と同等以上の価値がある。寸陰で取り組むには取り組む場所の工夫も必要である。

「三上（枕上、馬上、廁上）」といって、「ベッド、移動中、トイレ」の三か所で研究や趣味や学問した。寸陰を活用する「三上」を各自が持つことが望ましい。こういう心掛けを持っていれば、どんな境地であっても勉強できないことはない。

②良い師友を持つ

若者に大切な心掛けの一つは、人生の物事を浅はかに割り切らないことである。なぜなら、人生は非常に複雑な因果報の網で、変化極まりないものであり、凡俗な考えで軽々しく因果を独断することは、とても危険なことだからである。人生や物事は単純なものではない。従って、平時から善い人、善い物、善い書物：、善いもの、優れているもの、尊いものとはできるだけ縁を結んでおくこと。万物は多くの異質なものの微妙な統一調和からできている。だから、多面性が欲しい。しかし、雑駁になつてはいけない。

③読書、座右の書

精神的価値を高めるような、人間的真理を豊かに持っているような書がよい。それはつまり、いつも心に我が理想像を持つ、私淑する人物を持つ、生きた哲学を持つということである。これは人間として生きていく上で非常に大切なことである。

一般的な読書の欠陥は、雑書を読み、雑学となって、自由を誤解して「己をもって足れり」とし、人に心から学ぼうとしないことである。

④報恩感謝

人間は、生きる、成長するにしたがって、色々な因縁、お陰で自分が出来ていることが分かってくる。天地の恩、国の恩、先人たちや親の恩、道の恩、教えの恩：。そこで、この色々なお陰でできた時分だから、色々報いなければならぬ。これを報恩感謝という。恩に報いていくのが生活である。

⑤ 経験

倦まず臆せず勇敢に、あらゆる喜怒哀楽、栄枯盛衰、利害得失、艱難辛苦を嘗め尽くすことである。この経験によって体得する。

今月も、暑い夏がやってきた。
健康と健闘を。